



季節を知ったら
暮らしが楽しくなった

（第二八四号）

寒露

十月八日

馬瀬狂言

伊勢市の馬瀬には、狂言が伝わります。その始まりは室町時代。農民の間に伝えられてきた芸能で、江戸時代中期に今の形が作られたといえます。

かつては正月二十日に地元の馬瀬神社に奉納していましたが、今は九月の秋祭りに披露しています。今年は九月十六日。会場の馬瀬町公民館へ行くと、ちょうど餅まきをしているところでした。大勢の人々が集まっていて、地元の祭りであることがうかがえました。

狂言は、公民館の大広間舞台で演じられます。真新しい舞台の背景には老松が描かれています。演目は、鎌倉と都の薬屋が出会い、互いに薬効を競う「膏薬煉」、両手首を棒に結えられた太郎冠者と後ろ手に縛られた次郎冠者が縛られたままで酒を呑む「棒縛り」。舞台では、地元の保存会のメンバーが熱演。途中でセリフを忘れてもそこはご愛嬌、後見に助けられ、続けます。久しぶりに狂言を見ましたが、人間のこっけいさを描いた筋立ては親しみがもて、楽しむことができました。

伊勢市史には、馬瀬には百九十一番の台本が伝わり、なんでも式年遷宮の御木曳の際には、本曳前日の上せ車に舞台を作り、「釣狐」を演じていたとあります。一般的に知られる「釣狐」とは異なり、人間の姿となった狐の親子が伊勢参宮をするというあらすじで、「こんかい」と呼ばれたそうです。いかにも伊勢らしい出し物です。御木曳の出発地点の宮川へ着くまでに四回ほど披露したといえますから、盛り上がったことでしょう。

「こんかい」の復活を願うのは、私だけではないはず。次回の御木曳に期待したいものです。

文 千種清美



おかげの里便り

おかげ横丁

○ 恵みの市

10月15日より伊勢神宮にて執り行われる神嘗祭を奉祝し、秋の収穫を喜び神様に感謝する「恵みの市」を開催いたします。

と き／10月6日(土)～17日(水) 10:00～17:00

ところ／おかげ横丁一帯

● 御食国の産物市

伊勢志摩を中心とする生産者のこだわりの産物を集めた市が立ちます。

ところ／赤福別店舗側塀沿い一帯

● 伊勢路の新米市

三重県産を中心とした新米を集めました。香り豊かで甘みの多い新米をお楽しみください。 ※量り売りですので、少量からお求めいただけます。

ところ／おかげ横丁内「特設屋台」

五十鈴塾

○ 重陽の節句によせて

10月17日は旧暦の重陽の節句、新暦ですと露地物の菊の花はまだ咲いていません。日本人に昔から愛されている菊の花ですが、日本には野菊はあっても家菊はなく、奈良時代末期か平安時代初期に中国から渡ってきました。したがって万葉集には菊の歌はありません。9月9日を重陽の節句として菊の宴を楽しんだのは主に宮中で庶民にはあまり広まらなかったようです。菊を最も愛したのは鎌倉時代の後鳥羽院で十六弁菊を皇室の紋章にしたほどです。庶民が菊に熱狂したのは世の中が平和になった江戸時代、栽培が盛んになり新種も次々に生まれました。「菊作り汝は菊の奴かな」蕪村 という句が作られたほどです。最近ではもっぱら葬儀用の花のイメージがありますが、菊本来にはいろいろの薬効があり、長寿を寿ぐ花でした。菊についてのお話を伺いながら、菊花の宴のお食事をたのしみ、雅やかに煎茶を楽しむ贅沢な企画です。

と き／10月16日(火) 11:00～13:30

講師／藤原 和美(皇風煎茶禮式師範・日本現代作法会助教授)

参加料／一般3,500円 会員3,000円(食事代・茶菓代含む)

場所／五十鈴塾右王舎

※お問い合わせ・お申込み 0596-20-8251

五十鈴茶屋

○ 節気菓子

なごりづき
名残月

山芋と葛を合わせた生地で粒餡を包み、すすきの焼印を押して、名残月を表しました。

てりは
照葉

粒餡を中に包んだ、練りきりの紅葉。この時季らしい風情とともに、夕秋への想いがひとときわ高まります。

こすもす
秋桜

浮島の生地に葛寒天と羊羹を重ねて、風の渡りに波打つ、コスモスの群れに似せました。